和光大学現代人間学部紀要　第7号（2014年3月）

フィリピン系ニューカマー生徒の学業達成に関する一考察
トランスナショナルな家族ケアの影響に注目して

額賀美紗子 *NUKAGA Misako*

1 ── 問題関心
2 ──「家族ケア」のための国際移動
3 ── 調査の対象と方法
4 ── 渡日前の子どもたち─トランスナショナルな家族ケアの享受
5 ── 渡日後の子どもたち─トランスナショナルな家族ケアの担い手への成長
6 ── 結語─トランスナショナルな家族ケアの負担と学業達成

【要旨】本論文は、フィリピン系ニューカマーに特徴的な「トランスナショナルな家族」のありかたが子どもたちの学業達成に与える影響について、家族中心主義とケア労働の義務に注目して理解することを目的とする。3名についての4年間の継続的な参与観察とインタビューからは、フィリピン系の子どもたちが来日後の生活の中でトランスナショナルな家族を「ケアする者」へと成長を遂げ、家族ケアの義務が彼女たちの学習意欲を削いだり、継続的な学習活動を困難にさせていることが明らかになった。一方で3名の比較からは、「自分のために」学業意欲を高める事例も見出され、その要因として家族の経済状況と定住の程度、ジェンダー規範によって家族ケアの負担が比較的軽いことが指摘できる。しかし、この場合も親による学習支援は望めず、子どもは家庭外の学習資源に頼るしかない状況がある。これらの知見からは、ニューカマー生徒の学習に影響を与える要因として家庭環境を考える際、問題とする家族の文化や構造が、日本の社会や学校で自明視される「教育する家族」とは異なることに着目することが提起される。

1 ── 問題関心

近年、外国にルーツを持つ子どもたち、いわゆる「ニューカマー」の子どもたちの学力不振が注目されるようになり、その要因を探る研究が増えつつある。教育社会学の分野では家族の経済資本、文化資本、社会関係資本が子どもの学業達成に与える影響についての理論的・実証的研究が古くから積み重ねられており（Coleman 1988）、ニューカマー生徒を対象とした研究でも家族の文化や資源に注目したものが散見される。中でも「家族の教育戦略」をキー概念として、ニューカマーの親たちが子どもの学業達成に対して抱く理念と実際の資源動員に関する質的調査が蓄積されている（たとえば志水・清水 2001）。それらの先行研究からは、一般的にニューカマーの場合、親が子どもの学習を支えるために動員できる資源が少ないことが明らかになっている。また、教育戦略についてはエスニック集団間で違いがみられ、それぞれ固有の来日経緯や将来展望をもって教育戦略を立てていることが

示唆されている。これまでは中国系やブラジル系の家族に関する調査が多く積み重ねられているが[1]、近年はニューカマー生徒の出身国が多様化していることを受けて、さまざまなエスニック集団における家族の文化と構造を詳細に検討し、子どもの学業達成との関係を明らかにすることが求められている。

以上の問題関心を出発点として本稿が注目するのは、研究蓄積が未だ多くないフィリピン系ニューカマー生徒とその家族である。フィリピン系の家族に特徴的なのは、その構造が親子から成る核家族ではなく、往々にして多くの親族を含む拡大家族であること、さらに近年は多くの親が海外出稼ぎを行い、国境を越えてもなお家族成員が義務や愛情によって結ばれ続ける「トランスナショナルな家族」が形成されているということである（Parreñas 2001; パレーニャス 2007）。フィリピン系家族については、家族の結束とケアを重視する「家族中心主義」が特徴として指摘されており（Espiritu 2003; Parreñas 2001）、そうした価値規範が国境を越えたトランスナショナルな家族の維持を可能にしているという[2]。

公式統計では把握できないものの、日本に住むフィリピン系ニューカマーの子どもたちの中にもこうしたトランスナショナルな家族を形成している者は多くいると推測される（高畑 2011）。徳永（2008）や額賀（2012）は、幼少期に親と離別し、成長してから日本で働く親に呼び寄せられた中学生を調査対象とし、彼女たちが家族再編過程でさまざまな心理的負担を経験することや、日本に住んでいてもなおフィリピンに住む親族との繋がりを重視することを明らかにしている。

では、フィリピン系ニューカマーに特徴的な「トランスナショナルな家族」のありかたは子どもたちの学業達成にどのような影響を与えるのか。この問題について、本稿では特にフィリピン系家族にみられる家族中心主義とケア労働の義務という点から検討してみたい。次節ではまず、家族ケアの義務がフィリピン人家族の規範となっており、それがトランスナショナルな家族の形成を促していることを先行研究から検討する。

2――「家族ケア」のための国際移動

海外に移住するフィリピン人の増大は、「家族をケアするため」という動機づけに支えられている（Parreñas 2001; パレーニャス 2007; ヨー 2007）。「ケア」という言葉の意味について、Glenn（2010）は、「人々の生活を日常的かつ世代間において維持するために必要とされる関係性や活動」と定義し、それは「直接相手に関わり、相手の物理的・感情的なニーズに応える行為（食事を与える、お風呂にいれる、会話をする、買い物をするなど）」「相手が生活する物理的環境を整える行為（掃除や洗濯など）」「相手の社会関係を調整する行為（親族づきあい、近所づきあいなど）」の 3 タイプの行為から構成される。Parreñas（2001）はケアを家族の再生産のために必要な行為だと位置づけ、フィリピンでは家族をケアするための手段として海外出稼ぎが奨励されてきたことを指摘する。

1970 年代のマルコス政権時代以降、フィリピンでは国内経済が疲弊して対外債務が膨れ

上がったことを背景に、労働力の海外送り出し政策が推進されてきた（小ヶ谷 2003, 清水他 2013）[3]。すなわち、労働力を輸出して外貨を獲得することによって国内経済の立て直しと家族のケア体制の維持を図ってきたのである。現在のフィリピンでは多くの人々が仕事を求めて欧米や日本などの先進国に渡り、稼いだ賃金を母国に残してきた家族に送って、彼らの生活を支えることがごく一般的なことになっている。そしてこの動きは、母国と受け入れ国に跨って親子や親族が紐帯を保つ、「トランスナショナルな家族」の形成を促してきた。

さらにフィリピン人の海外出稼ぎにおいて特徴的なのは女性の多さである（ヨー 2007）。就労のために海外に流出するフィリピン人女性の数は約 18 万 5 千人であるのに対して、男性は 15 万 4 千人であり、女性が男性の数を上回っている（2010 年度海外雇用庁調べ）。職業別にみると圧倒的に家事労働者が多く、その数は 9 万人を超えている。つまり、海外で働くフィリピン人女性の多くは受け入れ国に住む家族のケアー家事や育児ーに関する労働に従事して賃金を得ることによって、フィリピンに残してきた自分の家族のケアを成立させているのである。

日本に住むフィリピン人の 8 割以上も女性であるが、彼女たちの多くは興行ビザを取得して「エンターテイナー」として入国した経歴をもっている（清水他 2013）。そのほかエンターテイナーに比べると少数であるが、家事労働者として入国した人々、また日系人として入国した人々も存在する。その中の少なからぬ数の人々が子どもをもつ親であり、母国に子どもを残して渡日している（徳永 2008; 高畑 2011; 額賀 2012）。母親たちは、日本からフィリピンに住む子どもや親族への定期的な送金、「家族へのお土産」を伴う一時帰国、そして頻繁なメールやインターネットツール（Skype や Facebook）、国際電話の利用によって、国境を跨いで家族の紐帯を維持している（額賀 2012）。すなわち、遠隔地から金銭と愛情を送り、母国に残してきた子どもと親族に対するケアを果たしているのである。

こうしたトランスナショナルな家族ケアは子どもたちの世代に受け継がれていくのだろうか。フィリピン系女性をインタビュー調査した小ヶ谷（2003）は、世代間で海外出稼ぎ文化が継承されていることを指摘する。徳永（2008）は、親に呼び寄せられたフィリピン系ニューカマーの中学生女子が、日本で働いてフィリピンの親族に送金をする母親をロールモデルとして自らも将来送金する立場になることを希望していると論じる。また、高畑（2011）は、呼び寄せられた子どもたちが「移住労働者の母親の恩恵を受けた子」として来日前に生活しており、来日後は「フィリピンへ送金するため日本にいる自分たちは我慢を強いられるのは自然なこと」と捉えていることを明らかにしている。これらの先行研究を踏まえて本稿で問題としたいのは、トランスナショナルな家族ケアを幼少期に受けた子どもたちが来日後どのように家族ケアに関わり、その過程がかれらの日本における学業達成にどのように影響しているかという点である。

本稿では 3 名のフィリピン系ニューカマー高校生の事例を通じて、彼女たちが来日後、「家族をケアする者」へと成長していく過程と学業達成の関連性について検討する。注目す

る点はふたつである。第一に、本稿では子どもたちは「家族にケアされる者」から、より主体的な「家族をケアする者」へと成長するという仮説を立てるが、その過程において子どもたち自身が「家族」や「家族ケア」をどのように意味づけているのか。第二に、そうした意味づけは、子どもたちの学習意欲や行動とどのように関わっているのか。これらの問いを通して、フィリピンの子どもたちが「家族ケア」という規範に強く縛られた存在であり、日本の学校と社会が前提とする「教育する家族」(広田 1999; 神原 2004) とは異なる環境に育っていることを明らかにする。その一方で、「家族ケア」の拘束の程度や影響のあり方は、個々の家庭状況によって異なることも考察したい。

3 —— 調査の対象と方法

本稿では親族の庇護のもと母国で生まれ育ち、離別していた日本在住の親に小学校高学年で呼び寄せられたフィリピン系の子どもたち 3 名の事例を取り上げる。筆者は 2009 年に NPO 団体の学習支援室で彼女達と出会い、以来 4 年間にわたって他の支援者と一緒に週 1〜2 回、継続的に勉強を教えてきた。2009 年当時、サラが中学 2 年生で、アントニオとジュディが中学 1 年生であった。全員が高校に進学し、2013 年現在、サラが定時制高校 3 年生、アントニオとジュディがそれぞれ定時制と通信制高校の 2 年生である。3 人ともフィリピン国籍であり、永住ビザを取得している。下表に 3 名の詳しいプロフィールをまとめた。

筆者は学習支援室で彼女たちを教えながら、やりとりや学習の様子を参与観察してフィールドノーツを作成した。また、60〜120 分程度の半構造的インタビューを 1 年に 1〜2 回、4 年間にわたって行った。2010 年には 3 人の親たちに 90 分程度のインタビューを行い、2011 年にはフィリピンにてサラとアントニオを育てた親族に会い、90 分程度のインタビューを行った。また、学校の三者面談に赴いたり、誕生日をはじめとするさまざまなパーティーに参加することもあり、こうした機会でも参与観察を行った。以下ではこれらのデータを使用し、まず渡日前の生活について考察した後、渡日後の学習適応の過程とケア労働の状況について検討する。

表　調査対象者のプロフィール

	性別	現在の年齢	渡日年	渡日時年齢	親との別離期間	同居家族の構成
サラ	女	18歳 （定時制高校3年生）	2006年	11歳 （小学5年生）	母親と10年	フィリピン人の実母・日本人の継父・異父姉1人・異父弟2人
ジュディ	女	17歳 （通信制高校2年生）	2006年	10歳 （小学4年生）	母親と10年	フィリピン人の実母（日本人の夫と離婚）・妹1人・異父弟2人
アントニオ	男	17歳 （定時制高校2年生）	2008年	12歳 （小学6年生）	母親と8年 父親と9年	日系フィリピン人の実父母・姉2人

4――渡日前の子どもたち―トランスナショナルな家族ケアの享受

親が日本に渡り、親族に預けられた子どもたちはどのような幼少期を母国で送っていたのだろうか。調査対象となった3人の親たちは皆インタビューの中で、生活が苦しく、「フィリピンの家族を助けるため」に日本での就労を決意したことを話した。彼女たちは毎月の定期的な仕送りのほか、子どもや子どもの面倒をみている親族が病気になったときにはまとまった大金をフィリピンに送っており、インタビュー時も送金を続けていた。こうした親からの送金によって、子どもたちは親族のもとで衣食住に困ることのない、経済的に安定した生活をフィリピンで享受していた。サラとアントニオの家では日本の親から送られてくるお金によってメイドを雇用し、親族は家事と育児の負担を軽減することが可能になっていた。

サラ、ジュディ、アントニオともに、親が不在であることについては「家族のために日本で働いている」と親族から聞かされていた。こうした「家族を養うために故郷を離れた親」の献身的なイメージは、親族の口を通して幼少期から子どもたちの心に植えつけられる。そのことによって子どもたちもまた、親が自分を見捨てたのではなく、「家族のために」日本に渡ったと納得していた。家族中心主義、とりわけ家族ケアの規範は、こうした幼少期を過ごす中で子どもたちに伝達されると考えられる。

母国に残された子どもたちについては、親と一緒に生活する子ども達と比べて自立心が高いという指摘もされている（Asis 2006）。傍でかれらを見守る親がいない状況では、子どもたちの行動の自由度が高く、精神的な自立が促進されやすい。こうした幼少期における自立心の芽生えは、将来自らが家族ケアの担い手となる上で重要だと考えられる。

この点について、たとえばサラを5歳から10歳まで育てた彼女の叔母はサラのことを「インディペンデント（自立心がある）」であるとして、次のように語った。

――サラはどんな子でしたか？
サラの叔母：とっても小さいときからインディペンデント。これして、あれして言わなくていい。自分でなんでもやる。インディペンデント。頭かたくない。
――お母さんいなくて嫌って言うことはありましたか？
サラの叔母：おばさんの言うことをよく聞いてたんで、そういうことはなかった。
――おばさんがお母さんの代わりだったんですね。
サラの叔母：はい、あとメイドさんがよくサラの面倒みてくれてた。

叔母によれば、サラは成績は良くなかったが、学校から帰ってくるとまず宿題を済ませ、それからテレビを観るということが習慣になっていた。サラはフィリピンの思い出として、30～50ペソ（日本円にして10～20円くらい）を小遣いにもらい、小学校の帰りにファース

トフード店に寄って食べ物を買い、家に戻ったことを楽しげに話していた。一方で、祖母や叔母に辛く当たられることもあり、2回ほど家出をしたこともあったという。

アントニオの場合も、親族の監視が緩い環境の中で育った。彼は当時の生活を振り返り、祖母は強く注意することがなかったので夜遅くまで外で遊び、日が暮れる頃になったら帰宅したと話す。そして、自分を残して日本に行ってしまった両親に関して次のように思っていたことを述べた。

アントニオ：俺は小さいときにはもうお父さんお母さんいなかった。お父さんお母さんはいなくて当たり前だと思った。おばあちゃんがお父さんとかお母さんみたいなものです。

――お父さんとお母さんはなんで日本に行ったと思っていた？

アントニオ：俺たちのため。うちお金なかったからお父さんたちが送ってくれた。

アントニオは親が傍にいないことを淋しく思ったこともあったが、成長するに従ってその状況を自明視するようになっていった。そして、親たちの仕送りに対して感謝する気持ちを表している。このように幼少期の間、子どもたちは親から金銭的な庇護を受ける一方、親の指図を受けなくてもすむ生活を送っていたことが分かる。

しかし、そうした生活は日本に来ることによって変化を余儀なくされる。日本に渡り、親と同居生活を始めることによって、家族をケアするという負担が子ども達に課せられていく。

5――渡日後の子どもたち―トランスナショナルな家族ケアの担い手への成長

親たちに呼び寄せられ、日本に住むことになった子どもたちは日本の社会と学校に適応していくと同時に、長い間離れて生活してきた親との再会を果たし、新しい家族生活を始めていく。その家族再編過程には大きな心理的負担が伴う（額賀 2012）。フィリピンに住んでいた当時、子どもたちはトランスナショナルな家族の形態においてケアを受け取る側であったが、日本に移り住むことによって彼女らの役割は、フィリピンと日本にいる家族に対してケアを与える側へと変わっていく。フィリピンの家ではメイドを雇っていたサラとアントニオは、日本移住後の生活の変化について次のように語った。

サラ：フィリピンではメイドいたから、日本に来たときびっくりした。Adjust（適応）しなきゃいけなかった。

アントニオ：うちもそうだ。（フィリピンでは）車洗うとかしかしなかった。日本に来たら全部やらなくちゃいけないからびっくりした。

――嫌だって言わないの？

アントニオ：I'm saying but you have no choice.（そう言ってるんだけど選択肢がない。）やらないと怒られる。

サラ：いろいろ言われる。掃除機、お皿洗いして、洗濯して、買い物して。（…）フィリピンの友達がメイドにまかせればいいじゃんって言うけど、馬鹿じゃないの、ここでは自分でやるんだよ。

さらに二人は将来の夢として日本で就労して貯金をし、育ててくれたフィリピンの親族に恩返しをするために送金をしたり、家を購入することを語る。

サラ：高校になったらバイトできるじゃん。Savings（貯金）してフィリピンに家買って。叔母さんとお兄ちゃんがいるからさ、子どものとき面倒みてもらったからさ、その人たちに家住んでもらう。サラは日本にいて、フィリピン帰ったらそこの家泊まることにする。でもうち大きくなったらママと住みたくない。貯金できないもん。ママはこれちょうだいあれちょうだいって言うからあげなきゃいけない。

アントニオ：俺は貯金して一人で住みたい。

――でも家族のサポートはしなくちゃいけないと思うの？

アントニオ：そうです。しなかったら悪い reputation（噂）で家族が自分を助けてくれません。

サラ：家族は絶対に口きいてくれません。

アントニオ：俺のこと息子だとおもってくれません。親が死んだら、俺のお姉ちゃんとか親戚が、「なんでお金とか食べ物とかあげなかったの？」って言います。フィリピンのおばあちゃんにもお金あげたいです。ずっと一緒に住んでてお母さんみたいだから。

この会話はサラが中学２年生（滞日３年）、アントニオが中学１年生（滞日１年）のときのものだが、すでに彼女たちが将来的に家族をケアする自分の役割について強い自覚があることが分かる。そしてここで述べられる「家族」とは日本で同居する両親のみならず、フィリピンで自分を育ててくれた親族も含む、より広義の「拡大家族」であることに注目する必要がある。彼女たちはかつて親がフィリピンに送金して自分も含む家族の生活を支えたように、その役割を今度は日本に渡った自分たちが引き受けようとしている。

では実際、子どもたちはどのようにトランスナショナルな家族をケアする者に育っていくのだろうか。その過程は、子どもたちの学業達成とどのような関係にあるのだろうか。

以下では「家族ケア」に関する意味づけや実際の負担が子ども達の間で異なり、そのことが学習の意欲や行動に影響していることを考察する。まず、サラとジュディの事例をとりあげ、彼女たちがトランスナショナルな家族のケアに拘束されることによって学習時間が制限され、学習意欲が削がれていることを示す。それに対して、アントニオはトランス

ナショナルな家族のケアの負担が軽く、大学進学することによって将来的に家族ケアを担おうとし、まずは「自分のために」学習に意欲的に取り組んでいることを示す。

5.1　日比にまたがる家族ケアの負担―サラとジュディの場合

最初にサラとジュディの学業達成の状況について述べよう。

【学業達成の状況―不登校の傾向と低い学力】

筆者がサラの学習支援を始めたのは彼女が中学2年生の時で、来日4年目だった。サラは「勉強がんばらなきゃ」と常に口にしていたものの、学校に遅刻することが多く、成績表も英語の評価3を除いて主要4教科は1という状況だった。宿題を提出しないため教師から頻繁に注意を受けており、授業中も休み時間も机に突っ伏して寝ていることが多かった。彼女の通学していた学校には外国人が数人在籍したが、学年やクラスが違うため親しくなることはなく、「友達がいないから学校つまらない」と会うたびに話していた。ノートに大きな文字で「I hate school（学校大嫌い）」と何度も書いていたのが印象的である。

一方で高校に進学する意欲は高く、担任教師が勧めた定時制高校に前期試験で合格した。1年生前期は学校に通って必要単位を取得したが、後期から遅刻が増え、2年次には遅刻や欠席が連日続くようになった。学校の教師や筆者ら学習支援者と話し合いを重ね、3年次は再び学校に通えるようになったが、相変わらず遅刻が多い。2年次にほとんど単位を取得していないため、3年間での卒業は不可能であり、4年間かけても厳しい状況である。かろうじて高校中退を踏みとどまってはいるものの、彼女の学習状況は良好とはいえない。日本語の読み書き能力は中学生時代からほとんど伸びておらず、学力は低い。しかし、彼女は「絶対高校は卒業したい」と話している。日本で美容師か服飾関係の職業に就きたいという夢を常日頃から語っており、そのために専門学校に進む意欲をみせる。

サラに比べると、1学年下のジュディは日本語の上達が早かった。筆者がジュディと出会ったのは来日3年目で彼女が中学1年生になった時だった。彼女は学校の宿題に非常に熱心に取り組み、分からない言葉の意味をさかんに筆者に聞いてきた。「最初は日本語分からなかったけど今は分かるようになった」と話し、日本人の友達も多く、学校に楽しんで通っている様子であった。一方、気になったのは中学1年生の終わり頃から筆者らの学習支援教室を頻繁に休むようになったことである。理由を尋ねると、「行きたいけどお母さんが弟の面倒見なさいって言うからダメだと思う」と話した。とはいえ、彼女は1か月に1回は支援教室に顔を出し、自分ひとりではできないような調べ学習や作文の宿題に関して手伝いを求めてきた。当時、ジュディは自分の将来の夢について、「たくさん勉強して大学行って、フィリピン人に日本語を教える人になりたい」と話していた。

このようにジュディは向学校的態度を示し、中学校1年生の成績表には3や4が並んでいた。しかし、中学2年以降、彼女は病気の祖母や叔父の世話をするため、母親と一緒に長期間の一時帰国を毎年繰りかえすようになる。中学2年次はフィリピンに5か月間滞在

し、戻ってきた時は「日本語が分からなくなった」と肩を落として話していた。中学３年次に再び帰国しており、日本に戻ってきたのはその５か月後、高校受験が間近に迫った11月のことであった。彼女は定時制高校の前期試験を受けたが不合格となり、後期試験で通信制高校に合格している。しかし、課題となっているレポートを提出することは稀で、1年次の単位は殆ど落としてしまった。そして高校１年の３月には再び母親と妹と一緒にフィリピンに緊急帰国し、半年間を過ごした後、日本に戻ってきた。その後、「勉強がしたい」と言って筆者らの学習支援教室に月に１回程度参加し、その間は学習に集中しているが、家で課題のレポートに取り組むことはほとんどない様子である。自分の将来についてジュディはかねてから夢だと語っていた日本語教師のほか、パティシエや美容関連の職業への興味を語るようになった。サラと同様、高校を卒業して専門学校に進学する夢を持っているが、現在の単位取得状況からは彼女もまた卒業が危ぶまれる。

以上みてきたサラとジュディの低い学力の要因はさまざまなところに求められるが、本稿ではトランスナショナルな家族ケアの負担という視点から考察してみよう。

【働く母のサポート―家事手伝いと子どもの世話】

サラとジュディに共通しているのは、母親がパブで働いており、出勤が夜間になることである。そのため、彼女たちは中学生の頃から、洗濯や掃除、皿洗い、小さい弟の面倒を家庭の中で負担していた。サラには２歳年上の姉がいるが、家の手伝いを全くしないため、両親から毎日のように怒られ、ついにフィリピンに帰されたという。中学２年のとき、サラは次のように語った。

> お姉ちゃんはお父さんとお母さんの言うこと聞かない。家の手伝いしないし、洗濯とか掃除とかしないから。外で遊んでばかりいて悪い子だって言われてフィリピンに帰された。サラはお姉ちゃんと違っていい子になってって言われるから、うちは洗濯して、洗濯ものたたんで、掃除機して、お皿洗ってる。あと弟たちの面倒もみてる。座ったばかりなのに、ママがふきんやって、お皿洗ってって言って、もううるさいなあって。

「悪い子」になってしまった姉とは違い、サラは自分が親にとって「いい子」であろうとして家事や弟の面倒をみている。こうした家事手伝いの負担は高校に入るとますます増えた。近所に住んでいる叔父叔母夫婦の４歳の息子が諸事情によりサラの家に一時期預けられることになり、サラが日中面倒をみることになったのである。そうした状況が半年ほど続き、ようやく子守りから解放されたと思った矢先、今度は「ママの友達の子ども」を母親が昼間働いている間預かることになり、再び子守りがサラの役割となった。夕方、学校に行く時間になると母親や母親の友達と世話を交代することになっていたが、その時点では疲れて学校に行く気がなくなったと彼女は話した。筆者らの学習支援教室には行きたい、

と母親を説得し、時間の融通をつけてもらったという。

ジュディもまた、夜間働く母親の代わりに家事と育児を負担している。中学時代、子どもの中で一番年長である彼女は、放課後はまっすぐ帰宅して2歳の異父弟の面倒をみるように母親に求められていた。そのために彼女は中学2年まで楽しんで続けていたバレー部の活動もやめざるをえなかった。前述のように、筆者らの学習支援教室に来ることもままならなかったため、サラがジュディの母親を説得しに行ったこともある。母親は家のことを手伝ってほしいから平日の放課後は家にいてほしいという強い要望を筆者らに伝えてきた。それを受けて筆者らはジュディの勉強時間を確保するため、土曜日に教室を開講することにしたが、ジュディは定期的に来ることができず、理由について尋ねると常に「家の手伝い」を口にしていた。

サラとジュディは家事の負担や幼い子どもの面倒をみることについて不満を抱いていたものの、働く母親に対する深い思いやりもみせている。次の文章は、ジュディが中学1年生の時に書いた作文である。

> 私のお母さんは毎日一生懸命仕事をしています。フィリピンにいる家族にお金を送らなくてはいけないからです。私はお母さんの手伝いをします。早く16歳になってお母さんのお店を手伝ってお母さんに楽をさせてあげたいです。

ジュディの母親に母国送金のことを尋ねた際、毎月定期的に送っているわけではないが、父親が死亡した際や兄が土地を購入する際に大金を送り、現在は母親と弟夫婦が住む住宅購入のために貯金をしていると話していた。上の作文に示されているように、ジュディは母親がフィリピンにいる親族が豊かな生活を送るために日本で必死に働いていることを知っている。そしてそうした母親を手伝うことが自分の役割であることを認識している。

サラもまた、自分の母親が夜間働いているのはフィリピンの家族に送金するためであると理解している。そのため、母親の負担を少しでも減らすために自分が家事をすることは仕方のないことだとも考えている。そうした思いやりを示す一方で、彼女はフィリピンの家族に対する母親の献身的態度に反発もしている。そうした意識は中学から高校に上がるにつれて強くなっていったようである。以下は彼女が高校1年のときのコメントである。

> ママは来年 family reunion（家族全員集合のパーティー）をオーガナイズしなくちゃいけないから大変なんだよ。ママが日本からお金送ってあげなくちゃいけない。ママは稼いだお金全部フィリピンに送っちゃう。自分のせいだけど。だからすごく大変。私そういうふうになりたくない。

サラの母親は一時期体調を崩していたが、サラはその原因を「働き過ぎ」と考えていた。母親のように体を壊すほどフィリピンの家族のために働きたくないと思う一方で、彼女は

母親を心配する気持ちを強く表し、母親に「いい子」と思われるために家事や育児を引き受けている。それはしばしば勉強をする意欲や時間と引き換えに行われる。

【フィリピンの親族ケア―アルバイトによる送金と看護のための一時帰国】

サラとジュディが日本の学校で勉学に集中できない原因のひとつとして、彼女たちが家族を通して物理的にも精神的にも強くフィリピンに結びついていることを考える必要がある。こうした日比間の強い結びつきは、4年の調査期間の間で弱まることがなかった。彼女たちは中学生のときから家事育児の手伝いをすることで、母親が外で働いてフィリピンの家族に送金することを可能にしていた。さらに高校に上がると、自分自身も送金することが親族たちから強く求められるようになる。 高校2年生のとき、サラは母親の収入を少しでも増やし、自らもフィリピンに送金するため、スーパーやドラッグストアでバイトを始めた。しかし、長続きはせず2，3か月で辞めている。その理由のひとつとして、彼女は送金を求めてくるフィリピンの親族への不満を打ち明けている。

サラ：バイトしてるってわかったら（フィリピンの叔母さんとおばあさんが）お金送ってって、300ペソ送ってってすぐ言ってくる。そんな少なく送れない。フェイスブックとか電話でずっと言ってくるの。ママみたくお金送ってばっかりになりたくない。

――それでバイトやめることにしたの？

サラ：はい、送らなくちゃいけないから。そうなりたくない。

――勉強するからバイトできないって言えば？

サラ：言ってもだめです。どうせ勉強してないんでしょって言われる。見てないから知らないのに。勉強する気なくなる。もう（フィリピンの家族を）フェイスブックからはずしちゃおうかな。でも無視するとまたなんか言われるし。

実際この後、サラは親族と繋がっていたフェイスブックのアカウントを停止している。親族からは電話で文句を言われたが、サラ自身は「メッセージがなくなってよかった」と話していた。しかし、しばらくして彼女はフェイスブックを復活させ、親族とも再びメッセージのやり取りを始めた。高校3年生になった彼女は再びバイトを始めることを考えてバイト情報誌やネット情報を熱心に探っている。バイトの収入をどうするのか尋ねると、「ママにあげたり、フィリピンに送ったりする」という。それが嫌でバイトを辞めたのではないかと尋ねると、彼女は「でもしょうがない」と答えた。親族が「どうせ勉強してない」という評価を下す中で、サラの関心は高校を卒業することよりも、割のいいバイトを探して母親やフィリピンの親戚に「いい子」と思われることに向いている。

送金や贈り物のほか、家族が病気になったときに看護をするということも重要な家族ケアの義務と考えられている。サラとジュディの母親たちは、祖母や兄弟が病気になるたび

にフィリピンに帰っていた。その際、家事や年下の子どもたちの世話はすべてサラとジュディに任されることとなり、この期間、彼女たちは宿題をすることもままならず、学習支援室に来ることもできなかった。ジュディの場合は彼女が中学2年になる頃から母親が一緒に彼女と彼女の妹をフィリピンに連れ帰っており、前述のようにその期間は5か月から6か月に及んだ。

ジュディが中学3年生のとき、筆者はある日の学習支援教室で彼女が突然帰国することを聞かされた。

ジュディ：先生バイバーイ。フィリピンにお母さんと一緒に帰るんです。おばあちゃん一人ぼっちで可哀そうだし、病気だから面倒みてあげなきゃいけない。

――帰るの嫌じゃないの？

ジュディ：ううん、どっちでもいい。お母さんが決めたことだから。こうしたいって言ってもお母さんが全部決めちゃう。おばあちゃん可哀そうでしょって言われてしょうがない。

このとき、彼女は「たぶん日本に戻ってくる」と言っていたが具体的な日程は決まっていなかった。母親の判断にすべてを委ね、それを受け入れている様子がうかがえる。5か月後、日本に戻ってきた彼女に尋ねると、フィリピン滞在中は祖母の面倒をみるため、ずっと家にいたという。フィリピンは義務教育が小学校で終了するため、中学生の彼女は学校に行くこともなく、日本語の教科書は持っていったが一度も開くことはなかった。日本の学校への再編入については、「日本語分からなくなっちゃった」「ストレスいっぱい」と話した。とりわけ高校受験に関しては殆ど準備期間がないまま試験を受け、不合格だったことに深いショックを受けていた。

ジュディは高校2年のときにも親族の看護のため、再び母親と一緒にフィリピンに帰国している。この際は祖母に加えて、叔父さんが高血圧で具合が悪いから面倒をみなくてはいけないと母親に言われた。滞在中、ジュディはずっと病院に泊まり込んで叔父さんの看病をしていたという。日本に戻ってきた彼女は、前にもまして日本語を忘れてしまったから勉強を頑張ることができないと言っていた。

高校生になって学習に対する興味や意欲が薄れていく一方、ジュディはバイトでお金を稼ぐことに時間を注ぐようになっていった。彼女はフィリピンから戻ってすぐにバイト探しを始め、面接に通って地元の弁当屋で働くことになった。日本語の意味が分からないことは多いが、先輩やマネージャーが親切なので楽しいし、「絶対続ける」と決意を表明する。初給料は5万だったが、半分を母親に渡し、その半分は母親からフィリピンの親族に送られたという。ジュディは「おばあちゃん病気でお金必要だから」と話した。サラと同じように、学業に専念するよりもバイトをして収入を得て、フィリピンの家族や母親を助けることが彼女の現在の目標となっている。

5.2　家族ケアの軽減と「自分のため」の勉強―アントニオの事例

次に、サラやジュディとは異なり、学習状況が良好で大学進学に高い意欲を示すアントニオの事例を、彼の家族ケアの考え方や実態と関連づけて考察する。

【学業達成の状況―不登校からのリセット】

筆者がアントニオと出会ったのは来日２年目、彼が中学１年生のときだった。日本語はまだおぼつかなかったが、勉強は好きだと話し、英語と数学の宿題に意欲的に取り組んでいた。中学１年の成績は５段階評価で英語が５、数学が４であった。学校適応は順調にみえたが、中学１年の終わりから遅刻や欠席が目立つようになり、中学２年次には不登校状態に陥っていた。当時のアントニオは暗い表情で口数も少なくなり、「友達とコミュニケーションできないから学校に行きたくない。I think I am failing（勉強ができなくなってる）」と話していた。この状況について日中働いている彼の両親と姉２人は気づくことがなく、不登校が続いて半年後、担任教師からの連絡を受けて初めて状況を認識した。当時、筆者は担任教師と学年主任と話をして、アントニオを不登校の生徒たちのために用意された適応指導教室に通わせる手続きを親にとってもらうことになった。中学３年生の間、アントニオは週４回適応指導教室に通い、週１回保健室登校をしていた。この少人数の指導教室を彼は楽しんだようで、やがて勉強への意欲を取り戻し、高校進学に向けて熱心に問題集に取りくむようになった。全日制の高校への進学を希望していたが、出席日数が足りないため、担任のすすめで定時制高校を受験して前期試験で合格した。

高校に入学後、アントニオは「中学では友達できなかったから高校では明るくして友達つくる」と話し、バドミントン部に入った。そこで親しい友達仲間ができ、学校は欠席することなく通い続けている。高校２年次には生徒会の書記係に立候補し、文化祭の実行委員としても活躍した。勉強への意欲もますます高まり、大学受験のシステムについて具体的に筆者ら学習支援者に尋ねてくるようになった。高校１年の夏にアントニオに依頼されて筆者は学校の三者面談に行ったが、担任教師は彼の学力について、「日本人の生徒よりできる。分からないことがあるとすぐ聞きにくるし、熱心でまじめ。正直、何でうちの学校に来たのか分からない」と話した。アントニオは周囲の生徒が全然勉強をせず、授業態度も不真面目であることについて不満をよく漏らす。そして生徒の大半が卒業に４年以上かかる中、自分は絶対に３年間で卒業したいという強い意志を表明している。高校２年に入って「ナースになりたい」という希望を口にするようになり、看護師資格を取得できる大学を受験することを考え始めている。このように、サラとジュディと異なり、アントニオは高校生活に適応し、勉強の習慣を身につけて大学進学に向けた準備を積み重ねている。この違いについて、家族ケアという側面から検討してみよう。

【家事手伝いや母国の親族ケアからの免除】

アントニオはサラ、ジュディと違って家事や育児の負担をほとんど担っていない。その

背景として、アントニオには弟妹がいないこと、そしてフィリピン人の両親は日中の仕事をしており、夕方には母親と姉二人が工場から帰宅して料理をつくったり、掃除洗濯をしたりしていることが挙げられる。数々の母親インタビューにおいて、フィリピン社会では男女に関係なく家事をしなくてはいけないということが語られたが、そうした語りとは異なり、実態としてのフィリピン家族には性別役割分業を柱とする伝統的な家父長制がみられる（Parreñas 2001）。アントニオの家においても、家事は主に女性の仕事になっており、家の手伝いはアントニオが勉強の時間を犠牲にしてまでするものではないという合意が家族の間ではできていたようである。

アントニオが不登校状態にあることを知った時に父親は激怒して彼に手を上げ、母親はずっと泣き通しだったという。当時、アントニオの両親にインタビューをしたが、二人は「とにかく学校に行って日本語を勉強してほしい」と話していた。日本語ができないフィリピン人の両親にとって、アントニオが日本の学校にきちんと通うことが最重要事項であった。一方、フィリピンで高校卒業後に来日した彼の姉たちは「日本語を学びたい」という強い意欲をもっていたものの、仕事や家事を優先するように両親から言われていたため日本語を学ぶ機会を全く作れない状況にあった。姉ふたりが母とともに家事全般を受け持っていたため、アントニオは家事の負担を逃れて勉強に専念する環境を家の中につくることができたのである。

また、フィリピンの家族への送金に関しても両親と姉ふたりが担い、かれらは合わせて月に 4 万から 5 万円をアントニオの祖母と叔父夫婦に送っている。また、アントニオが高校進学したころ、両親は貯金で祖母のためにフィリピンに家を建てた。このように、両親と姉 2 人はフィリピンの親族のケアを絶え間なく行っていることが分かる。しかし、その義務はアントニオに対しては強く課せられてはいない。

また、両親と姉 2 人は高齢の祖母の様子を見に年に一回は一時帰国をしているが、飛行機代金が高く、実家のある島は飛行機と船を乗り継いで日本から 2 日以上かかるため、アントニオ自身は渡日してから 2 回しかフィリピンには帰っていない。サラやジュディと異なり、彼はフィリピンでの生活の記憶が薄くなりつつあり、親族との紐帯も彼女達と比べると弱い。フィリピンの親族をケアしなくてはいけないという意識は低く、フィリピンとの心理的・物理的繋がりが比較的弱い中で、彼は現在住む日本の学校生活をいかに充実させるかということに関心を向けている。

【大学進学を通じた家族ケアと「自分のため」の勉強】

フィリピンの親族に現在送金をしたり、頻繁に一時帰国をしたりといったことはないものの、前述のように、アントニオは両親や親代わりであった祖母に対して「恩返し」をしたいと考えている。高校 1 年の時、アントニオは次のように語っていた。

お父さんとお母さんはフィリピンに最近家建てたんです。帰るつもりみたいです。俺、

将来はフィリピンにお金送らなきゃいけない。In Philippine, children give back to their parents（フィリピンでは親にお返しをします）。俺はちゃんと勉強して大学に行きたい。それでお父さんとお母さんに proud（誇り）に思ってほしい。大学行って、仕事して、お金貯めて家建てる。

サラやジュディと同様に、アントニオもまた親にとっての「いい子」でありたいと願っている。彼の言葉を引用すると、「いい子」とは「明るくて元気で友達いっぱいいて、まあ、時々両親とケンカするけど、それがたまにだけってかんじで、家族のことを大切にする。勉強ちゃんとする子」である。このように3人の子どもたちは全員が「家族をケアする」という規範に強く縛られていた。しかし、サラとジュディが家事手伝いやバイト、母国の親族への贈り物、送金、そして一時帰国を行い、中学生から高校生の時点ですでにケア労働に従事しているのに対して、アントニオはそうしたケア労働からは解放されている。彼の場合、勉学を通して安定した収入のある職業に就き、将来的に家族をケアすることが目標となっている。そうした考えの中で、彼は看護師になることを希望している。

下記のサラ、ジュディ、アントニオ（それぞれ高3、高2、高2時点）のインタビュー会話からは、彼女たちが「ケア」労働に対してどのような意識を持っているかを考察することができる。筆者がインタビューの中でジュディに将来展望を尋ねたときのことである。思いがけず、ケアギバー（caregiver）という言葉が子ども達の間から発せられた。

サラとアントニオが目くばせをして、手の平を上に向けてそれを前後に揺らす動作をして笑い出した。

サラ：caregiver。ジュディは caregiver になりたいんだって。

ジュディ：（ちょっと怒ったように）ちがうよ。

――これ（手のひらを揺らす動作をする）どういう意味？

サラ：（笑って）おじいさんのお尻を拭いてる。ジュディはフィリピンでおじさん病気のときやってたんだって。caregiver。

―― caregiver ってどういう仕事？

アントニオ：おじいさんおばあさんの面倒みたり、赤ちゃんの面倒みたり。

ジュディ：掃除したり、メイドみたいなかんじ。

――ジュディは caregiver になりたくないの？

ジュディ：（首を激しく振って）絶対やだ。大変だから。もっとおしゃれな仕事がいい。美容師とか、メイクとかマッサージする人とか。

アントニオ：俺もやですよ。辛い。

――でもナースって caregiver じゃないの？

アントニオ：違いますよ。ナースも世話しますけど、薬とか扱って専門的なことを知ってます。でも caregiver はただ世話するだけ。大学行かなくてもなれる。

サラ：うちも caregiver やだ。でもフィリピンから赤ちゃん来るかもしれないし、そしたらうちが面倒見るのかも。やだな。

伊藤ほか（2008：121）によれば、ケアギバーとはフィリピン政府が近年設けた新しい雇用のカテゴリーであり、高齢者や身体障害者に対してパーソナルなケアやサービスを提供する資格を持った者、と定義されている[4)]。興味深いのは、子どもたち自身が caregiver というカテゴリーを認識しており、それを炊事、洗濯、育児、介護などを行う「メイドみたいな」人として捉えていることである。そして caregiver に対する彼女達の評価は非常に低く、「大変」で「辛い」から仕事として選択したくないと考えている。一方で、ジュディとサラは自分が家族のケアギバーとして果たしてきた役割や、将来的にそうした位置づけに再び甘んじる可能性も認識しており、そのことに大きな不満も抱いていた。それに対して、アントニオはナース（看護師）と caregiver の間に明確な線引きをし、より「専門的」で大卒資格が必要なナースになりたいという希望を強く表明している。「世話／ケアをする」という点では同じであっても、自分は大学進学を果たすことで caregiver よりも威信の高いナースになるという強い意志が彼の発言からはうかがえる。

このように、アントニオは「家族ケア」の規範に拘束されながらも、まず勉強を頑張ることによって大学進学と就職を成し遂げ、その先で家族への「恩返し」をしようと考えている。彼もまたサラと一緒にバイトを探し始めているが、それはサラのように母親やフィリピンの親族をケアするためではなく、自分の大学進学資金を貯めるためである。下記は、アントニオが中 1、サラが中 2 のときに筆者が「勉強は好き？」と尋ねた時の回答であるが、この会話からは「家族のために」勉強することを重視するサラとは違い、アントニオが「自分のために」勉強することに意味を見出していることが分かる。

サラ：勉強しているのは自分のためだけじゃないから。I’m studying for myself and for my family.（自分のためと家族のために勉強している）

アントニオ： I study just for myself, then I want to support my family.（俺は自分のためだけに勉強する、それから家族をサポートする）

サラとジュディが家族ケアに強く拘束された生活を送っているのに対して、アントニオの場合、そうした家族規範の束縛が比較的弱く、「自分のために」勉強する意思を強くもつようになっている。しかし、こうした彼の学習意欲が家庭内で実質的な支援を受けているわけではない。両親は仕事が忙しい上に、日本語がほとんど読めず、日本の学校に関する知識も不足しているため、アントニオが両親を頼りにすることはなく、彼は学校や筆者らの教室において支援を受けることで学習意欲を維持している。

6 ―― 結語―トランスナショナルな家族ケアの負担と学業達成

本稿では、学齢期に本国から呼び寄せられたフィリピン系の子どもたちが、フィリピンから日本に渡る過程で「トランスナショナルな家族をケアする者」に成長していく変化に注目し、そうしたケア労働の拘束が学業達成に与える影響を考察した。今回事例として取り上げた3名はみな家族ケアの規範に従う態度を見せて家族を「助ける」「恩返しする」ことを重視していたが、その規範に拘束される程度や、ケアの解釈と実践については違いがみられた。そのことが学業達成の違いを生じさせていると考えられる。

サラとジュディの事例から示唆されるのは、フィリピンの親族をケアする義務によって強く束縛され、そのことが彼女たちの日本における学習意欲を削いだり、継続的な学習活動を困難にさせているパターンである。彼女たちは家庭内の家事や育児を担うことで母親がフィリピンの親族に送金することを支援したり、自分自身がバイトに従事することで送金の担い手となること、そして親族が病気のときは一時帰国をしてでも看護をひきうけることを余儀なくさせられている。彼女たちはこうした状況を変えられるとは思っておらず、「どうしようもない」と諦めの心境を表してケア労働を要請する親や親族に対してあからさまな反発をみせたりしない。せいぜいがフェイスブックなどの連絡手段を一時的に遮断するといった行動をとるくらいである。そうした従順な態度はフィリピンの家族中心主義（Espiritu 2003; Parreñas 2001）によって促されていると考察できる。

ニューカマーの子どもたちが早い年齢段階で学習意欲を失い、不就学の末に就労の世界に身を投じることは先行研究でも明らかにされている。その原因として日本の学校文化からの排斥が指摘されているが、日系ブラジル人の場合、日本社会における消費文化の魅力が賃金を稼ぎ好きなものを買うという行動にかれらを駆り立てていると指摘されている（児島 2008）。フィリピン系の子どもたちがアルバイトに魅力を感じているのは、消費文化の影響も少なからずあるだろう。しかし、本稿で述べてきたように、アルバイトに従事することによって家計を助け、育ててくれた家族の恩に報いることを可能にするという彼女たちの視点も重要である。「家族ケア」規範を中心とするフィリピン文化の特異性がここに指摘できる。

しかし、こうした文化的要因だけではなく、彼女たちがケア労働に引き込まれていく背景としては家族が埋め込まれている経済的・社会的文脈やジェンダーといった構造的要因も考慮する必要がある。この点については、同じフィリピン文化に育つアントニオの状況と比較した時に明らかになる。アントニオの学習意欲が高く、高校以降の学業成績が良好なのは、サラ、ジュディとは異なり、アントニオが家族ケアの労働から比較的解放されているためである。

その背景として第一に、彼の家族が経済的に安定し、日本定住の基盤を築いていることが挙げられる。彼の両親と姉二人は日中工場で働き、夜は母親と姉が家事をする生活が成

立している。一方、サラの日本人の継父はリストラの危機に何度も直面しており、母親がパブの仕事を辞めると生活ができない。また、ジュディの母親は生計を共にしていた日本人男性と別れ、自分だけの収入でジュディを含めた4人の子どもを養っている。こうした困窮生活の中で、サラとジュディは不可欠な労働力となっている。

また、アントニオの両親が日本に家を購入して日本での生活を中心に考えていることは、フィリピンの親族に対するケアから彼を解放している。それに対して、サラとジュディの母親はフィリピンの親族との紐帯が強く、頻繁な送金や一時帰国を行っており、サラとジュディたち自身にもその責任の一端が強く課せられている。トランスナショナルな家族がどの程度維持されているかによって、子どもたちの日本における学習状況と家族ケアの負担の度合いが変わってくることをここでは指摘できる。

さらに、ジェンダーの影響も考慮する必要がある。前述のようにフィリピン社会は伝統的な性別役割分業を柱とする家父長制家族が一般的であり、家事や育児は女性の仕事になっている実態がある（Parreñas 2001）。また、caregiver として海外出稼ぎに出るのも圧倒的に女性が多い（伊藤ほか 2008）。アントニオの家庭で母と姉2人が家事に従事し、彼は放免されていることや、サラの家庭で弟2人の世話や家事を彼女が受け負っていることは、ジェンダーにおける不平等構造が背景にあると推測される。

このように、フィリピン系の子どもたちは家族中心主義文化の中でトランスナショナルな家族によって「ケアされる者」から、トランスナショナルな家族を「ケアする者」に成長していく。本稿では、そのことが家族が埋め込まれている経済的・社会的文脈、ジェンダーなどの構造的要因と絡まって子どもたちの学習意欲や学力に与えている可能性を示唆し、日比を跨ぐ家族へのケア労働が子どもたちの学習困難を生み出していることを提示した。この仮説がフィリピン系ニューカマーの子どもたちに一般化できるかについては、より多くの事例を検討する必要があるだろう。家族をケアするというフィリピン文化の規範から逸脱するフィリピン系の子どもたちもいることが予測される。また、アントニオのように、家族の経済状況や定住の程度によっては、家族ケアの規範が緩み、「家族のため」よりも、まずは「自分のため」に学習意欲を高める事例もみられる。フィリピン文化における家族ケアの規範は固定的なものではなく、受入国における家族の経済的・社会的状況によって変化していくものとして捉える必要がある。

また、本論文の知見は、ニューカマーの子どもたちの学習に影響を与える要因として家庭環境を考える際、問題とする家族の文化や構造が日本で自明視される「家族」と大きく異なることを詳細に検討する必要性を提起するものである。広田（1999）によれば、日本では大正期以降、親が子どもの学習に配慮して学業達成を支える「教育する家族」が新中間層の間に出現し、高度経済成長期には専業主婦の急増とともに母親が子どもの教育に全力をつくす「パーフェクトマザー」を目指す現象が都市部を中心に広まった。こうした「教育する家族」において、子どもは親の庇護の対象であり、家事手伝いの労働から放免され、勉強だけに専念できる環境が整えられている。三輪（2000）は、現代の日本社会にお

ける子どもの手伝いは、「日常生活を円滑に行うためではなく、親子のコミュニケーションを円滑にするための１つとして捉えた方がいいだろう」と述べている。

一方、本稿で述べてきたように、フィリピン系の子どもたちにとって家事手伝いをはじめとするケア労働は、労働の負担を家族から減らし、家族成員の生活を維持するために不可欠な行動である。神原（2004）は、高度経済成長期においても、農業などの自営業層では経済力がない場合には勉強よりも家の手伝いを子どもに期待するような子育て観が保持されていたと述べ、その様相は都市部のサラリーマン家庭の「教育する家族」に対して、「教育を容認する家族」であったと指摘する。フィリピン系の親たちも経済状況や日本語、日本の知識不足から「教育する家族」になることは非常に困難である。とはいえ、フィリピン系の親たちが子どもに高い教育期待をかけていることも明らかになっており（額賀 2012)、子どもたちは経済的な余裕があれば勉強時間の確保や大学進学が認められるような、「教育を容認する家族」の中で生活しているといえるだろう。サラやジュディとは異なり、アントニオの場合は経済的・社会的に安定した地位を日本で築きつつあるため、家族が教育を容認する度合いが高いと考えられる。また、現代の日本では家族の「個人化」が進み、家族成員それぞれが「家族のため」ではなく、「自分のため」に「自分らしさ」を追求して判断し、行動することが顕著になってきていると指摘されている（神原 2004)。仮説的ではあるが、アントニオが「自分のため」に勉強すると言及するのも、学校生活を通じて、日本社会におけるこうした「個人化」の影響を受けているためかもしれない。しかし、こうしたアントニオの個人化されつつある学習意欲は、家庭内で実質的な支援を受けることはない。アントニオの親たちはフィリピンの家族中心主義を維持しており、経済的な余裕がなければ「家族のため」に大学進学を断念するようにアントニオに伝えている。こうした親との齟齬によって、アントニオは親との心理的溝を深めつつある。

現代の日本の学校と社会は、親（特に母親）が子どもの教育に重い責任を負う「教育する家族」を自明視している。学校の教師たちは、ニューカマー家族においてそうした教育的配慮が難しい理由について殆どの場合何も知識をもたない。フィリピン系の子どもたちが、国境を跨いで親族のケアを日常的に行っていることに気づく契機は日々の学校生活の中で少ないだろう。そのため子どもたちの低い学習意欲は個人の責任に帰せられがちである（志水・清水　2001)。子どもたちがトランスナショナルな拡大家族のケアを担わざるをえない状況を理解し、かれらの学習意欲や学習時間を保障する制度やまなざしの形成が必要とされる。

《注》

1）文部科学省の 2012 年度統計によると、小中高校段階で日本語が必要な外国人児童生徒は 27,013 人で、母語別にみると１位ポルトガル語（8,848 人)、２位中国語（5,515 人)、３位フィリピノ語（4,495 人)、４位スペイン語（3,480 人)、５位ベトナム語（1,104 人）の順に多い。ブラジル出身および中国出身の子どもたちを対象とした研究が先行したのは、このようにポルトガル語、中国語を母語とする子どもたちが日本の学校の中で最初に「問題化」したことが挙げられる。一方、近年はフ

ィリピン系の子どもたちの増加が著しい。2007 年度には 2,508 人だったのが 2012 年度には 2000 人近く増えている。また日比国際結婚が多いことを考慮すると、国籍は日本だがフィリピンに出自をもつ子どもは公式統計に出てくる人数よりもずっと多いことが予想される。

2）フィリピンの家族においては「家族の間の集団性と相互義務」を意味する pakikisama が伝統的な価値規範となっている。Parreñas（2001）によれば、この pakikisama の考えに表出される家族中心主義文化があってこそ、家族成員間のトランスナショナルな紐帯が保たれている。

3）フィリピンでは人口の 1 割が海外労働者となっており、世界有数の労働力輸出国となっている。POEA （フィリピン労働雇用省海外雇用庁）の調査によると、2010 年時点でフィリピン人海外労働者の母国への送金額の総計は 187 億米ドルであり、GDP の約 1 割を占める。日本に入国するフィリピン人は 2005 年の興行ビザ厳格化以降は減少傾向にあるが、日本滞在者から母国への送金額は依然として大きい。

4）伊藤ほか（2008）は、政府によるケアギバーの創出奨励が「ケア上手なフィリピン人」という言説を浸透させ、家事や育児といった再生産労働を「国際商品」化してフィリピン人女性の労働力搾取につながることについて警鐘を鳴らしている。

《参考文献》

伊藤るりほか，2008,「いかにして「ケア上手なフィリピン人」はつくられるか？―ケアギバーと再生産労働の「国際商品」化」『国際移動と＜連鎖するジェンダー＞―再生産領域のグローバル化』作品社，117-143.

小ヶ谷千穂，2003,「フィリピンの海外雇用政策―その推移と『海外労働者の女性化』を中心に」小井土彰編『移民政策の国際比較』明石書店，311-356.

神原文子，2004,『家族のライフスタイルを問う』勁草書房.

児島明，2008,「在日ブラジル人の若者の進路選択過程―学校からの離脱/就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』1：55-71.

志水宏吉・清水睦美， 2001,『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.

清水睦美ほか，2013,「「フィリピン」という国の概況―日本社会とのマッチングのための覚え書き」平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究（B）報告書『国際結婚家庭に育つフィリピン系ニューカマーの学校適応に関する実証研究』163-193.

高畑幸，2011,「在日フィリピン人の 1.5 世―教育と労働が隣り合わせの若者たち」『解放部落研究』527(10)：54-63.

徳永智子，2008,「「フィリピン系ニューカマー」生徒の進路意識と将来展望―「重要な他者」と「来日経緯」に着目して」『異文化間教育 』28：87-99.

額賀美紗子，2012,「トランスナショナルな家族の再編と教育意識―フィリピン系ニューカマーを事例に」『和光大学現代人間学部紀要』5：7-22.

パレーニャス，ラセル・サルザール，2007,「女はいつもホームにある―グローバリゼーションにおけるフィリピン女性家事労働者の国際移動」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う―現代移民研究の課題』有信堂，127-148.

広田照幸，1999,『日本人のしつけは衰退したか―「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書.

三輪聖子，2000,「子どもからみた親との関係―子どもの手伝いをめぐる親子関係を中心に―」神原文子・高田洋子編『教育期の子育て親子関係』ミネルヴァ書房，102-118.

ヨー，ブレンダ，2007,「女性化された移動と接続する場所―「家族」「国家」「市民社会」と交渉するトランスナショナルな移住女性」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う―現代移民研究の課題』有信

堂，149-172.

Asis, M. M. B., 2006, “Living with Migration: Experiences of Left-Behind Children in the Philippines,” *Asian Population Studies*, 2 (1): 45-67.

Coleman, J., 1988, “Social Capital in the Creation of Human Capital,” *American Journal of Sociology*, 94: 95-120.

Espiritu,Y. L., 2003, *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries*. Berkeley: University of California Press.

Glenn, E. N., 2010, *Forced to Care: Coercion and Caregiving in America*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Parreñas, R. S., 2001, *Servants of Globalization: Women, Migration, and Domestic Work*. Stanford: Stanford University Press.

＊本研究は、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「国際結婚家庭に育つフィリピン系・タイ系ニューカマーの学校適応に関する実証研究」（課題番号 22330238　研究代表者　角替弘規）の成果の一部である。

［ぬかが　みさこ・和光大学現代人間学部心理教育学科専任講師］